

# 藤原京跡 VI

—右京四条三坊—

2016年1月

奈良県橿原市教育委員会

## 序

ここに藤原京跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第13冊』として刊行します。

当教育委員会では、奈良県橿原市縄手町地内において計画された共同住宅建設に伴い、平成26（2014）年度に発掘調査を実施いたしました。

橿原市内には、特別史跡 藤原宮跡、史跡 新沢千塚古墳群をはじめとした、日本史上重要な遺跡が多数あります。調査地は、日本最古の本格的な都城である「藤原京」の中央付近に位置しており、藤原宮のすぐ西隣にあたります。近隣では、当教育委員会のほか、奈良文化財研究所や橿原考古学研究所が調査を実施し、藤原宮と藤原京の実態を明らかにしてきました。今回の調査でも、藤原京期の遺構や遺物が確認されました。この調査により、藤原京の中心部における様相が、より明確になる成果が得られたと考えられます。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本書の刊行にあたりご協力いただいた関係諸氏ならびに諸機関に厚く御礼申し上げますとともに、本書が多くの方々にも活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

平成28年1月29日

橿原市教育委員会  
教育長 吉本重男

## 例 言

- 1 本書は、藤原京右京四条三坊（榑教委 2014-4 次）発掘調査の報告書である。調査地は奈良県橿原市繩手町 149-1 に所在する。
- 2 発掘調査は、共同住宅建設工事に伴って提出された埋蔵文化財発掘届出書に基づき、奈良県教育委員会事務局文化財保存課の指導のもと奈良県橿原市教育委員会事務局生涯学習部文化財課が実施した。
- 3 現地調査期間は、平成 26(2014)年 9 月 2 日～同年 10 月 27 日である。また、平成 27 年度に遺物整理・報告書作成業務を行った。
- 4 現地調査時および報告書作成時における当課の体制は、文化財課長 竹田正則、課長補佐 濱口和弘、統括調整員 平岩欣太・米田一（平成 27 年 3 月 31 日まで）、事業調整係長 田原明世（平成 27 年 4 月 1 日～）、主査 石坂泰士、技師 杉山真由美である。（調査担当・報告書作成担当：杉山）
- 5 現地調査および整理・報告書作成には 吉川 貴三子 氏 ならびに 有限会社 ヤマナカ に御協力いただいた。記して感謝申し上げます。
- 6 現地調査および遺物整理を実施するにあたっては、地元各位をはじめ多くの方々への御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。
- 7 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。
- 8 本書所収の写真のうち、現地調査写真は杉山が撮影を行った。遺物写真はアートフォト右文 佐藤右文氏が撮影を行った。

## 凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第 VI 系）に基づく。
- 2 図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 4 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示した。
- 5 遺構番号は基本的に調査時に付与した番号を使用している。
- 6 土層断面図における網掛け部分は遺構基盤層（層序 V 層）及び地山（層序 VI 層）を示す。
- 7 遺物実測図の番号は本書全体の通し番号で示した。図版の遺物番号もこれに合わせている。
- 8 土器の実測図については、須恵器は断面を黒塗り、その他は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 9 藤原京の条坊呼称は岸俊男氏による復元条坊呼称に従う。
- 10 土器型式名は西弘海『土器様式の成立とその背景』に従う。

# 目 次

序	.....	i
例言・凡例	.....	ii
目次	.....	iii
挿図目次・図版目次	.....	iv
第Ⅰ章 調査の概要	.....	1
第1節 発掘調査に至る経緯	.....	1
第2節 発掘調査の経過	.....	1
第3節 地理的・歴史的環境	.....	2
第Ⅱ章 発掘調査の成果	.....	5
第1節 調査の方法と基本層序	.....	5
第2節 遺構	.....	9
第3節 出土遺物	.....	12
第Ⅲ章 総括	.....	14
報告書抄録	.....	16
図版	.....	17

## 挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	2
図 2	調査地周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	3
図 3	調査地周辺図 (S = 1/2,500)	5
図 4	調査区南壁土層断面図 (S = 1/60)	6
図 5	調査区東壁土層断面図 (S = 1/60)	7
図 6	上層遺構平面図 (S = 1/100)	8
図 7	下層遺構平面図 (S = 1/100)	9
図 8	遺構断面図 (S = 1/40)	10
図 9	22SP 遺物出土状況図 (S = 1/10)	12
図 10	20SD 遺物出土状況図 (S = 1/20)	12
図 11	藤原京期の遺物 (S = 1/4)	13
図 12	藤原京期以外の遺物 (S = 1/4、1/2)	14

## 図 版 目 次

図版 1 上段	上層遺構検出状況 (北から)
図版 1 下段	上層遺構検出状況 (北西から)
図版 2 上段	上層遺構完掘・下層遺構検出状況 (北から)
図版 2 下段	上層遺構完掘・下層遺構検出状況 (北西から)
図版 3	調査区と調査地周辺 (北から)
図版 4 上段	下層遺構完掘状況 (北西から)
図版 4 下段	下層遺構完掘状況 (南東から)
図版 5 上段	27SK 炭化物層検出状況 (東から)
図版 5 下段	27SK 土層断面 (東から)
図版 6 上段	22SP 遺物出土状況 (北から)
図版 6 下段	23SP 土層断面 (北から)
図版 7 上段	24SP 土層断面 (北東から)
図版 7 下段	柱列完掘状況 (北から)
図版 8 上段	34SP 土層断面 (西から)
図版 8 下段	35SP 土層断面 (西から)
図版 9 上段	39SP 土層断面 (西から)
図版 9 下段	40SP 土層断面 (西から)
図版 10 上段	20SD 遺物出土状況 (北から)
図版 10 下段	20SD 土層断面 (北から)
図版 11	出土遺物

# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 発掘調査に至る経緯

本調査地は岸俊男氏による藤原京の復元家坊呼称に従うと、藤原京右京四条三坊にあたり、その詳細な位置は右京四条三坊の東北坪東端である。藤原宮に接する当該地は、奈良県教育委員会により重要遺跡藤原京跡の重点地区に指定されており、軽微な土木行為以外は事前の発掘調査が必須の場所である。

本調査地における共同住宅建設の工事計画を契機に、事業者と当教育委員会が協議を行い、平成 26 年 8 月 12 日に現地発掘調査実施の契約を締結した。なお、平成 27 年 4 月 20 日には、遺物整理・報告書作成実施の契約を締結した。

## 第 2 節 発掘調査の経過

共同住宅建設予定箇所に調査区を設定し実施した。平成 26 (2014) 年 9 月 2 日から同年 10 月 27 日までの期間を要し、実働日数は 37 日間である。調査期間中の日々の記録は、以下の通り調査日誌抄録に掲げた。

- 9.2 (火) テント設置。調査前状況の写真撮影を実施。続いて、機械掘削を開始し、全体の約 4 割を完了。
- 9.3 (水) 機械掘削を実施し、全体の約 7 割を完了。素掘溝数条を検出。遺構面の高さは、現況 GL+1.2 m 程度である。
- 9.4 (木) 機械掘削を実施。天候悪化のため、14:30 で現地作業を中止。全体の約 9 割を完了。
- 9.5 (金) 天候不順のため、現地作業を中止。
- 9.8 (月) 機械掘削、調査区の壁及び平面の精査を実施。
- 9.9 (火) 攪乱の掘削。続いて平面精査を実施。
- 9.10 (水) 上層遺構(素掘溝) 検出状況の写真撮影を実施。西・北西・北・南東からの計 4 カットを撮影。午後からは、攪乱掘削、素掘溝の調査を実施。
- 9.11 (木) 素掘溝の調査を実施。天候悪化のため、15:30 に現地作業を中止。
- 9.12 (金) 排水溝の掘り下げ。素掘溝の調査を実施。土師器、須恵器片が多数出土。素掘溝の調査は概ね完了。
- 9.16 (火) 上層遺構完掘状況写真撮影のための清掃を実施。同時に、素掘溝より古い遺構の検出を実施。
- 9.17 (水) 上層遺構完掘状況の写真撮影を実施。検出時と同様 4 カットの他、トレンチ中央にある溝(20SD)の検出状況 1 カット、計 5 カット撮影。
- 9.18 (木) 20SD の調査を実施。溝の南半分から開始。土師器、須恵器の破片が出土。
- 9.19 (金) 20SD と他の下層遺構の調査を実施。20SD 理上からは、土器片や石が多く出土。遺物の取り上げを南と北に分けて実施。22SP からは、遺構の時期を決定することが可能な土師器片が出土。
- 9.22 (月) 20SD の調査と北側排水溝の掘削を実施。上層遺構(素掘溝)の平面図作成。
- 9.24 (水) 20SD の調査を実施。理上には礫が混じり、破損状態の土師器片が 3～4 個体出土。上層遺構素掘削の平面図作成。
- 9.25 (木) 天候不順のため、現地作業を中止。
- 9.26 (金) 27SK の調査を実施。遺構の重複関係の確認と記録を実施。20SD の清掃を実施。
- 9.29 (月) 20SD の遺物出土状況の写真撮影後、遺物出土状況図の作成。
- 9.30 (火) 27SK、28SP、30SP、29SP、25SP、21SK の調査を実施。27SK の底付近には、炭化物層が広がる。各遺構断面図、遺構平面図の作成。
- 10.1 (水) 28SP、25SP、30SP、20SD の調査が完了。27SK の炭化物層検出状況の写真撮影と、平面図、断面図を作成。22SP の遺物出土状況の写真撮影の実施。平面図、断面図を作成。
- 10.2 (木) 22SP の調査が完了。続いて、34SP、35SP の調査を実施。20SD の底で検出した 36 SP の調査も実施。34SP、35SP は調査区の東壁にかかる平面形隅丸方形と考えられるピットである。
- 10.3 (金) 21SK、27SK、29SP、31SP、36SP の調査が終了。平面図も概ね完了。
- 10.6 (月) 天候不順のため、現地作業を中止。
- 10.7 (火) 調査区清掃を実施。
- 10.8 (水) 藤原京期の遺構の完掘状況写真撮影を実施。
- 10.9 (木) 調査区東端のピット群(34・35・39・40SP)の完掘状況の写真撮影を実施。より下位の遺構の有無を確認するために、藤原京期遺構の基礎層の掘り下げを実施。
- 10.10 (金) 藤原京期遺構基礎層の掘り下げを実施。遺構基礎層内からは時期不明の遺物が出た。調査区東壁、南壁上層断面図の作成。南壁のみ完了。
- 10.14 (火) 藤原京期遺構基礎層の掘り下げを実施。43・44 層上面において遺構等が検出しなかったため、更に下の地山と考えられる黄色の粘土層(45・46 層)の上面までの掘り下げを決定。調査区東壁上層断面図の作成。
- 10.15 (水) 現地作業中止。
- 10.16 (木) 43・44 層の掘り下げを実施。調査区東壁断面図の作成。
- 10.17 (金) 43・44 層の掘り下げを実施。遺構基礎層内には縄文土器が含まれ、藤原京期以前の土層形成時期の上限を示すと判断。地山層上面で遺構検出を実施。遺構のように見える箇所が存在したが、調査の結果遺構でなく地形の落ち込みだと判断。調査区東壁上層断面

図の作成。  
10.20 (月) 調査区東壁・南壁の清掃、内壁の上層断面写真撮影を実施。  
調査区南壁上層断面図の確認を実施。  
10.21 (火) 調査区東壁上層断面図、調査道具の撤収準備を実施。

10.22 (水) 調査区東壁上層断面図の確認を実施。  
10.23 (木) 埋戻しを実施。  
10.24 (金) 埋戻しを実施。  
10.24 (月) 埋戻し完了の確認。現地調査完了。

### 第3節 地理的・歴史的環境

橿原市は奈良盆地南部に位置する。市域の南端と東端は竜門山地の北縁にあたり丘陵地形となるほかは、ほぼ低く平らな沖積地である。市内には、曾我川、高取川、飛鳥川、米川、寺川などが地形に沿って北西流もしくは北流する。これらの河川によって市内北西部の扇状地性低地が形成されている。一見平らに見えるこの沖積地は、河川の流れが示す通り、南東から北西方向にゆるやかに傾斜している。なお、各河川の流路については、条里地割の正方位方向に付け替えが実施されたことにより、直角に曲がる部分がある。奈良時代以降は耕地化の進んだ橿原市域ではあるが、一部では旧流路の形状を留める地形が残存する。他方、市の南から南東部の丘陵地帯はかつて一連の山塊であったと考えられている。風化と河川の浸食により、丘陵部分は開析谷の発達した樹状地形となり、貝吹山や香具山といった独立丘陵を形成している。これらの丘陵部の地盤は風化花崗岩が主体である。沖積地内には火山性の独立丘陵である欽傍山・耳成山が存在し、いずれも弥生時代に石包丁の材料として利用された流紋岩を産出する。香具山と欽傍山・耳成山は「大和三山」と呼ばれ、名勝に指定されている。調査地の立地する繩子町はこの沖積地上、耳成山と欽傍山のちょうど間に立地する。

調査地の位置は、繩子池の北約250mにあり、国道165号線橿原バイパスの東に隣接している。調査地周辺はバイパス沿いであるため開発が進んでいるが、調査地より東は特別史跡藤原宮跡が存在し、古い集落と水田景観が広がる。

橿原市の歴史的環境について述べる。橿原市内において人類の活動が活発になるのは縄文時代後期

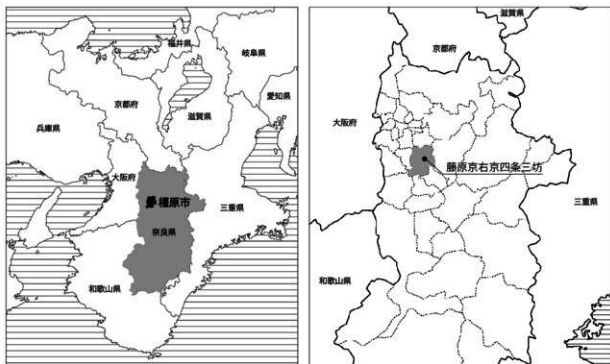


図1 調査地位置図

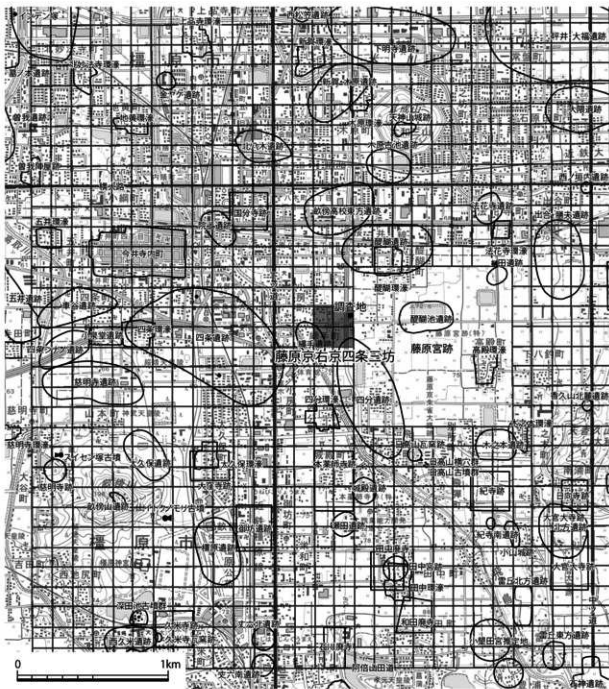


図2 調査地周辺の遺跡 (S = 1/25,000。格子目は藤原京復元案坊)

以降である。畝傍山東麓にある橿原遺跡では、後～晩期の大量の土偶や日本各地から持ち込まれた土器が出土している。曾我川左岸に位置する曲川遺跡でも、晩期の土偶と土器棺が多数確認されている。さらに南の観音寺本馬遺跡では、環状杭列や竪穴建物等のほか、河川に埋没した状態の樹木が確認され、晩期の集落のみでなく当時の植生までが明らかとなった。

弥生時代には沖積地内に集落が形成され、複数の大規模集落が確認されている。寺川左岸にある坪井・大福遺跡からは、人物線刻画土器（市指定文化財）や漆塗木製柄頭といった特異な遺物が出土している。飛鳥川右岸にある四分遺跡からは、竪穴建物跡や水田跡、方形周溝墓も確認されている。曾我川右岸には中曾司遺跡が立地する。中曾司遺跡では中～後期に環濠が掘削されていたと考えられている。後期になると、丘陵部に忌部山遺跡や上ノ山遺跡といった高地性集落が出現する。



古墳時代には多数の古墳と集落が存在した。前期には、畝傍山周囲のスイセン塚古墳やイトクノモリ古墳、銭川右岸の下明寺古墳群、貝吹山北麓にある新沢千塚古墳群（史跡）の500号墳等が存在するが数は少ない。新沢千塚古墳群は前期から後期まで営まれ、中期に最盛期を迎える。中期の長方形墳である126号墳からは、金製方形冠飾や垂飾付耳飾等の中国・朝鮮製の装飾品や、ベルシヤ製のガラス碗・皿等の国際色豊かな副葬品が出土した。後期には市城南東の丘陵部で、大型の横穴式石室が設けられた前方後円墳である丸山古墳（国指定史跡）や、2基の横穴式石室が設けられた長方形墳である植山古墳（国指定史跡）、石室内に2基の家形石棺が納められていた二段築成の大型方墳である菖蒲池古墳（国指定史跡）が築かれる。これらの後期古墳の被葬者は、天皇家や有力氏族の人物が想定されている。

沖積地では、曾我川右岸に前期の集落である五井遺跡が存在する。中期には四条遺跡で集落跡が確認されている。大田中地区では大溝が検出され、初期須恵器や韓式土器を含む渡来系遺物や琴等の木製品が出土した。なお、四条遺跡内の四条古墳群造営に四条遺跡集落が関わったと想定されている。曾我川左岸に位置する新堂遺跡は前期から営まれた集落である。中期の生産関連遺物や祭祀具等の他、渡来系遺物が出土しており、四条遺跡同様渡来人との関係が窺える遺跡である。

飛鳥時代以降には市域の約7割に日本史上初の本格的都城である藤原京が営まれた。藤原京は天武天皇の代に造営が開始され、持統天皇8（694）年に開かれた都である。岸氏が示した藤原京の復元案は、横大路と下つ道、中つ道、阿倍山田道に囲まれる一帯を占めるものであった。1979年の榎原市葛本町における調査以降、岸氏の示した藤原京域外においても藤原京と同様の道路遺構の検出例が増加した。1995年に榎原市土橋遺跡で西京極が、桜井市上之庄遺跡で東京極がそれぞれ確認され、東西5.3kmという広大な都であったことが判明した。藤原宮は、藤原京のおおむね中央に位置する。なお、今回の調査地の東南では藤原宮西面大垣が確認されている。

藤原京内では、多数の古代寺院が築造された。右京八条三坊の一町と七条三坊の南半町を占めていた本業師寺は現在、東・西塔及び金堂基壇とそれぞれの礎石が残る。藤原宮下層の運河埋土から出土した軒瓦と金堂に葺かれた軒瓦が共通する型式であることから、創建は藤原京遷都以前と考えられている。紀寺は左京八条二坊全域に位置する。創建年代は出土軒瓦から天智朝と考えられているが、寺域や伽藍配置の計画線が藤原京の土地区画に合致しており、藤原京造営に伴い再整備されたと考えられる。

奈良時代以降、奈良盆地の広範囲においては条里に基づいた耕地化が進行し、中世以降は貴族や寺院の荘園と化していった。平安時代には、貯水を目的として高取川を塞ぎ止めて益田池が造営された。益田池堤跡（県指定史跡）の近隣では、丸太を利用した木樋が出土している。中世に入ると環濠集落が営まれるようになる。調査地の周辺だけでも、四分環濠、醍醐環濠、法花寺環濠、高殿環濠といった環濠集落が現存するが、環濠に由来する水路や区割りは近世以降のもと考えられている。市の中心部には一向宗本願寺の今井道場を中心に成立した今井寺内町が立地し、近世には商業都市として栄えた。その東では、初瀬街道と中街道が交差し交通の要衝となる八木札の辻が宿場町として栄えた。

調査地近隣においては、バイパス築造や建築工事に伴い、奈良文化財研究所や当教育委員会による発掘調査が実施され、藤原京跡をはじめ、先史から中世の様相が明らかになりつつある。

## 第Ⅱ章 発掘調査の成果

### 第 1 節 調査の方法と基本層序

調査区は建物建設予定箇所に設定した。調査区の規模は東西(北側)11.6m、東西(南側)14.8m、南北15.3mの南西端が西に飛び出す形状である。調査面積は186.4㎡である。

後述のⅤ層上面までを重機で掘削、除去し、その他の遺構の検出、掘り下げ等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は形成時期とその内容から、大きく6層に分かれる。いずれの土層も概ね水平に堆積する(図4・5)。

Ⅰ層：現代造成土 上面の標高68.7m(南・東壁1層)

Ⅱ層：現代耕作土 上面の標高68.0m(南・東壁2層)

Ⅲ層：旧耕作土 上面の標高67.7～67.8m(南壁3～12層、東壁53～57層)

Ⅳ層：藤原京期以後の土層 上面の標高67.5～67.6m(南壁25～28層、東壁65～71層)

Ⅴ層：藤原京期遺構基盤層 上面の標高67.3～67.5m(南・東壁42層、東壁86～89層)

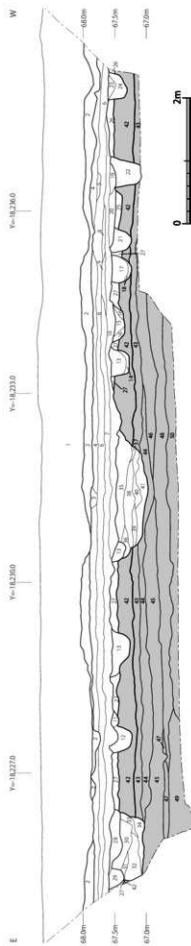
Ⅵ層：地山 上面の標高67.2m(南・東壁43層、南壁44～50層、東壁90層)

Ⅲ層中からは瓦器片が出土し、中世以降の堆積であると判断できる。

Ⅳ層は上面が素掘溝の検出面である。後述するⅤ層との層序関係から藤原京期以後の土層と判断で



図3 調査地周辺図 (S = 1/2,500)



- |             |             |   |             |                                   |
|-------------|-------------|---|-------------|-----------------------------------|
| 1. 遺土       | 29. 2536/2  | 灰黄色粘質シルト (マンガンを含む) [ 崩壊層理上 ]            | 39. 10786/1 | 灰白色粘質シルト (マンガンを含む) [ 21SK 層上 ]    |
| 2. 506/4    | 30. 10787/1 | 灰白色細砂質粘土 (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         | 40. 2537/1  | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 20SD 層上 ]   |
| 3. 1076/1   | 31. 10787/1 | 灰白色シルト (鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]              | 41. 10786/2 | 灰黄色粘質シルト [ 20SD 層上 ]              |
| 4. 10786/3  | 32. 10786/1 | 灰黄色粘土 (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]            | 42. 2538/1  | 灰黄色粘質シルト (多量のマンガンを含む) [ 下部崩壊層理部 ] |
| 5. 1076/1   | 33. 10786/3 | 灰黄色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         | 43. 7535/1  | 灰白色粘質シルト (多量のマンガンを含む) [ 21SK 層上 ] |
| 6. 10787/4  | 34. 335/1   | 灰黄色粘土ブロック                               | 44. 10786/3 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]   |
| 7. 2536/2   | 35. 2536/2  | 灰黄色粘質シルトブロック                            | 45. 10786/3 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]   |
| 8. 2536/4   | 36. 2537/1  | 灰黄色粘質シルト (遺物、φ=5cm 以下の礫を含む) [ 20SD 層上 ] | 46. 10786/4 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]   |
| 9. 335/2    | 37. 10786/6 | 灰白色粘質シルト (鉄分、マンガンを含む) [ 20SD 層上 ]       | 47. 2537/1  | 明灰色粘質シルト (鉄分を含む) [ 崩壊層理上 ]        |
| 10. 335/2   | 38. 2537/1  | 灰白色粘質シルト (φ=5cm 以下の礫を含む) [ 20SD 層上 ]    | 48. 2538/4  | 明灰色粘質シルト (鉄分を含む) [ 崩壊層理上 ]        |
| 11. 10786/4 | 39. 10786/1 | 灰白色粘質シルト (φ=5cm 以下の礫を含む) [ 20SD 層上 ]    | 49. 35/0    | 灰黄色粘土 (硬塊、鉄分を含む)                  |
| 12. 10786/4 | 40. 2537/1  | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 20SD 層上 ]         | 50. 2535/1  | 灰黄色粘土 (10786/6 明黄色粘質シルトブロックを含む)   |
| 13. 2535/3  | 41. 10786/2 | 灰黄色粘質シルト [ 20SD 層上 ]                    |             |                                   |
| 14. 335/2   | 42. 2538/1  | 灰黄色粘質シルト (多量のマンガンを含む) [ 崩壊層理上 ]         |             |                                   |
| 15. 2536/3  | 43. 7535/1  | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         |             |                                   |
| 16. 335/1   | 44. 10786/3 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         |             |                                   |
| 17. 2536/2  | 45. 10786/3 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         |             |                                   |
| 18. 335/1   | 46. 10786/4 | 灰白色粘質シルト (多量の鉄分を含む) [ 21SK 層上 ]         |             |                                   |
| 19. 10787/1 | 47. 2537/1  | 明灰色粘質シルト (鉄分を含む) [ 崩壊層理上 ]              |             |                                   |
| 20. 335/1   | 48. 2538/4  | 明灰色粘質シルト (鉄分を含む) [ 崩壊層理上 ]              |             |                                   |
| 21. 2536/2  | 49. 35/0    | 灰黄色粘土 (硬塊、鉄分を含む)                        |             |                                   |
| 22. 335/2   | 50. 2535/1  | 灰黄色粘土 (10786/6 明黄色粘質シルトブロックを含む)         |             |                                   |
| 23. 2536/3  |             |   |             |                                   |
| 24. 2536/3  |             |   |             |                                   |
| 25. 10786/4 |             |   |             |                                   |
| 26. 10786/4 |             |   |             |                                   |
| 27. 10786/6 |             |   |             |                                   |
| 28. 10786/2 |             |   |             |                                   |

図 4 調査区清浄土層断面図 (S = 1/60)

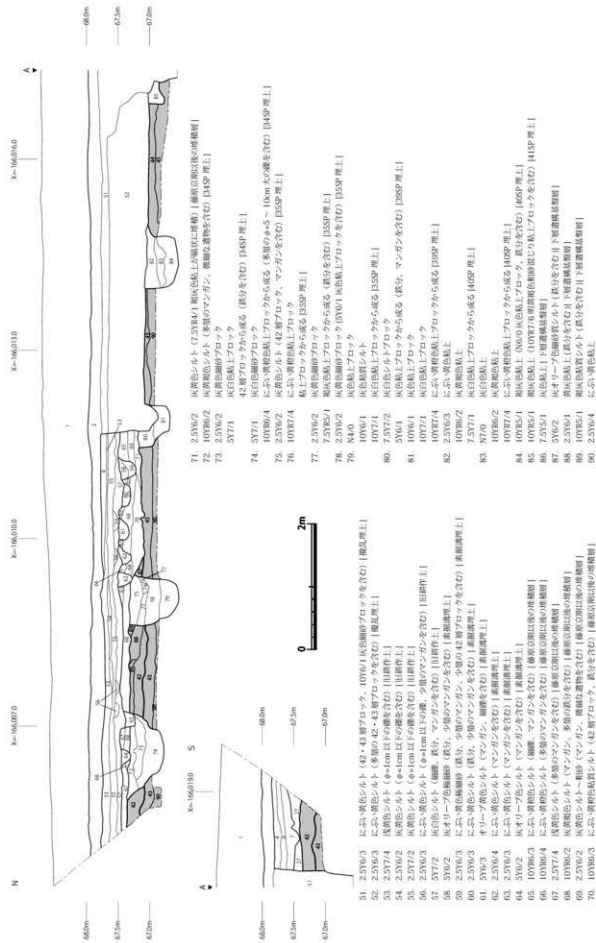


図5 調査区東壁土層断面図 (S=1/60)

51. 2.576/3 にごい黄色シルト (42・43層プロック、1076/1 灰白細砂プロックを含む) [黒田遺跡上]
52. 2.576/3 にごい黄色シルト (多量の42・43層プロックを含む) [黒田遺跡上]
53. 2.577/4 灰黄色シルト (φ=1cm以下の礫を含む) [黒田遺跡上]
54. 2.576/2 灰黄色シルト (φ=1cm以下の礫を含む) [黒田遺跡上]
55. 2.577/2 灰黄色シルト (φ=1cm以下の礫、少量のマンガンを含む) [黒田遺跡上]
56. 2.576/3 にごい黄色シルト (黒田、黒田、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
57. 377/2 灰白シルト (細砂、黒田、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
58. 376/3 灰白シルト (細砂、黒田、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
59. 2.576/3 にごい黄色細砂 (鉄分、少量のマンガン、少量の42層プロックを含む) [黒田遺跡上]
60. 2.576/3 にごい黄色シルト (鉄分、少量のマンガンを含む) [黒田遺跡上]
61. 376/3 オリーブ黄色シルト (マンガン、黒田を含む) [黒田遺跡上]
62. 2.576/4 にごい黄色シルト (マンガンを含む) [黒田遺跡上]
63. 376/3 灰白シルト (マンガンを含む) [黒田遺跡上]
64. 376/2 灰白シルト (マンガンを含む) [黒田遺跡上]
65. 10786/3 にごい黄褐色シルト (細砂、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
66. 10786/4 にごい黄褐色シルト (多量のマンガンを含む) [黒田遺跡上]
67. 10786/5 にごい黄褐色シルト (マンガン、少量の鉄分を含む) [黒田遺跡上]
68. 10786/2 灰黄色シルト (マンガン、少量の鉄分を含む) [黒田遺跡上]
69. 2.576/2 灰黄色シルト (細砂、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
70. 10786/3 にごい黄褐色シルト (42層プロック、鉄分を含む) [黒田遺跡上]

71. 2.576/2 灰黄色シルト (7.574/1 濁り色粘土層) [黒田遺跡上]
72. 10786/2 灰黄色シルト (多量のマンガン、黒田を含む) [黒田遺跡上]
73. 2.576/2 灰黄色細砂プロック 灰白細砂プロック 42層プロックから成る (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
74. 577/1 灰白細砂プロック 42層プロックから成る (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
75. 10786/4 にごい黄褐色シルト (多量のφ=5~10cmの礫を含む) [黒田遺跡上]
76. 10787/4 にごい黄褐色シルト (42層プロック、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
77. 2.576/2 灰白細砂プロック 灰白細砂プロック 灰白細砂プロックから成る (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
78. 2.576/2 灰白細砂プロック 灰白細砂プロックから成る (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
79. 1076/1 灰白細砂プロック 灰白細砂プロックから成る (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
80. 7.577/2 灰白シルト (7.577/1 灰白シルトプロックから成る) [黒田遺跡上]
81. 1076/1 灰白シルト (7.577/1 灰白シルトプロックから成る) [黒田遺跡上]
82. 2.576/3 にごい黄褐色シルト (鉄分、マンガンを含む) [黒田遺跡上]
83. 7.577/1 灰白シルト (7.577/1 灰白シルトプロックから成る) [黒田遺跡上]
84. 10786/2 灰黄色シルト 灰白細砂プロックから成る (4.05P 遺跡上)
85. 10786/1 灰白シルト (10786/2 灰白細砂プロックから成る) [黒田遺跡上]
86. 7.577/1 灰白シルト (10786/2 灰白細砂プロックから成る) [黒田遺跡上]
87. 2.576/1 灰白シルト (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
88. 2.576/1 灰白シルト (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
89. 10786/1 灰白シルト (鉄分を含む) [黒田遺跡上]
90. 2.576/4 にごい黄色シルト 灰白細砂プロックから成る (4.05P 遺跡上)

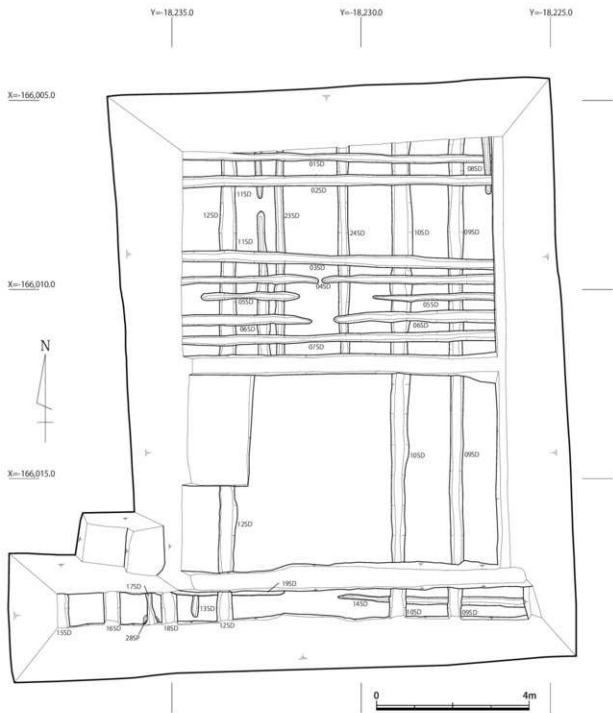


図6 上層遺構平面図 (S = 1/100)

きる。

V層は上面が藤原京期の遺構面である。堆積時期は藤原京期より前である。石包丁(図12-20)といった弥生時代の遺物を僅かに含むため、土層の形成時期は弥生時代まで遡る可能性がある。調査区南東部分では、上面がIV層形成時の影響を強く受けており、他の地点より0.2mほど低くなっている。

VI層内の43層からは縄文時代後期の土器(図12-19)が出土しており、土層の形成時期は少なくとも弥生時代以前と考える。弥生時代以前の遺構の確認を目的にVI層以下においても遺構の検出作業を実施したが、遺構は存在しなかった。また、調査区南側で43層以下をさらに掘り下げ調査を実施したが遺物は出土しなかった。

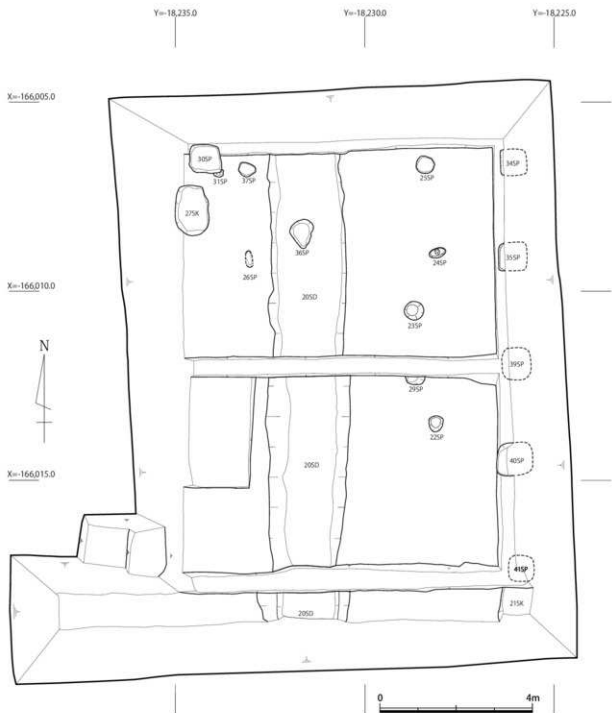


図7 下層遺構平面図 (S = 1/100)

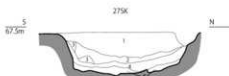
## 第2節 遺構

遺構面は2面存在する。上層遺構面はIV層上面、下層遺構面はV層上面である。上層遺構と下層遺構の検出作業はいずれもV層上面で実施した。

IV層上面が掘り込み面となる遺構を上層遺構とした。検出遺構は素掘溝のみである。素掘溝は、東西方向と南北方向とがあり、重複関係から南北方向が古く、少なくとも2時期以上に亘って掘削されたと考えられる。素掘溝の機能は、耕作に伴う鋤溝と想定する。素掘溝からは藤原京期の土師器や須恵器の小片、土馬の脚(図11-17)、石製と想定する用途不明品(図12-21)が出土した。素掘溝



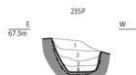
1. 10YR6/1 期灰色細～中砂 (鉄分を含む)
2. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト  
(10YR7/1 灰白色、7.5YR4/1 期灰色シルトブロックを含む)
3. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック  
10YR7/1 灰白色シルトブロック  
7.5YR4/1 期灰色シルトブロックから成る



1. 10YR6/2 灰黄褐色中砂質シルト (マンガン、遺物、中礫を含む)
2. 2.5Y7/1 灰白色粘土 (少量の遺物を含む)
3. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト
4. 炭化物層
5. 5Y7/1 灰白色粘土 (2.5Y7/6 明黄褐色地山ブロック、遺物を含む)



1. 10YR7/1 灰白色シルト質粘土  
10YR6/4 にぶい黄褐色シルトから成る
2. 10YR7/1 灰白色粗砂混じり粘土



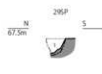
1. 10YR6/2 灰黄褐色中粒砂混じり粘質シルト  
(10YR7/6 明黄褐色ブロックを含む)
2. 10YR7/2 にぶい黄褐色粘土～シルト
3. 10YR7/2 にぶい黄褐色中粒砂混じり粘質シルト
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘土  
(10YR7/6 明黄褐色ブロックを含む)



1. 2.5Y6/2 灰黄褐色粗砂混じり粘土
2. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質シルトブロック  
10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック  
10YR7/6 明黄褐色シルトブロックから成る
3. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質シルト  
10YR5/2 灰黄褐色シルトから成る



1. 10YR7/1 灰白色粘質シルト  
(10YR4/1 期灰色シルトブロックを含む)



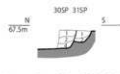
1. 10YR7/1 灰白色細砂質シルト  
(7.5YR4/1 期灰色シルトを含む)



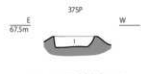
1. 10YR7/1 灰白色シルト質粘土 (中礫を含む)
2. 2.5Y6/1 黄灰色粘土 (中礫を含む)



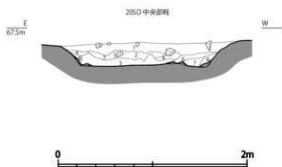
1. 10YR7/1 灰白色中砂混じり粘質シルト (マンガン、鉄分、遺物を含む)
2. 10YR7/1 灰白色中砂混じり粘質シルト
- 10YR4/3 にぶい黄褐色から成る
3. 5Y6/1 灰色粘土～中砂混じり粘土
4. 5Y7/1 灰白色粗砂混じり粘土 (中礫を含む)



1. 10YR6/1 期灰色シルト (中礫、鉄分、マンガンを含む)
2. 10YR6/1 期灰色粘質シルト (鉄分を含む)



1. 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロックを含む)



1. 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト (中礫、マンガン、鉄分を含む)
2. 5Y7/1 灰白色粘土 (中礫、鉄分を含む)
3. 2.5Y6/1 黄灰色シルト～細砂  
(10YR4/1 期灰色シルトブロック、  
10YR7/6 明黄褐色シルトブロックを含む)
4. 10YR4/1 期灰色粘質シルトブロック  
10YR7/6 明黄褐色シルトブロックから成る
5. 7.5YR4/1 期灰色粘質シルトブロック  
10YR4/1 期灰色粘質シルトブロックから成る
6. 2.5Y6/1 黄灰色シルト～細砂  
(10YR4/1 期灰色粘質シルトブロック、  
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック、鉄分を含む)
7. 7.5YR4/1 期灰色粘質シルト
8. 5Y7/1 灰白色中砂質粘土

図8 遺構断面図 (S = 1/40)

埋土には藤原京期の土器片が含まれるため、素掘溝の時期は藤原京期以降である。また、素掘溝の埋土がⅢ層の土と類似するため、下限としては中世以前と判断する。素掘溝の掘削はⅤ層中まで達し、藤原京廃絶後から中世の間にⅤ層を破壊しつつ耕地化が進められたと考える。

Ⅴ層上面から掘り込まれている遺構を下層遺構とし、土坑・ピット・溝を検出した。

調査区南東端で検出した21SKは平面形が方形である。南側は調査区外に延び、北側は後世の攪乱で破壊されている。最大幅0.6 m、深さ0.4 m。遺物は出土せず詳細な時期と機能は不明である。調査区北西端で検出した27SKは平面形が長楕円形である。底面付近には炭化物が薄い層を形成する。長軸約1.3 m、短軸0.7 m、深さ0.4 m。埋土からは土師器と須恵器の破片(図11-2、11、12)の他、燃えさし(図11-18)や木片が出土した。遺物の時期は藤原京期である。

調査区東壁沿いは4間以上の柱列を検出した(北から34SP、35SP、39SP、40SP、41SP)。いずれも調査区外まで広がって平面形は不明であるが、隅丸方形と考える。柱痕は調査区内には存在しなかったが、調査区外に残存する可能性がある。柱穴は南北方向に並び、柱穴間の距離は2.7 m(9尺)、底部分のレベルは標高66.5～66.8 mである。柱穴埋土には小片の土器を含むのみで詳細な時期は不明である。Ⅴ層上面が掘込面であるため、少なくとも藤原京期の遺構と想定する。34SPの北側、41SPの南側は調査区外になるため、柱列は調査区外に延びる可能性が残る。また、東側に延びる可能性もあり、柱列の機能が建物か柵かは不明である。34SPは最大幅1.3 mで深さ0.5 m。35SPは最大幅0.8 mで深さ0.8 m。39SPは最大幅0.7 mで深さ0.5 m。40SPは最大幅1.0 mで深さ0.5 m。41SPは最大幅0.4 mで深さ0.3 m。当初、調査区東端で柱列を検出することを想定しておらず、39・41SPは排水溝掘削の際に破壊してしまう結果となった。

柱列の西側では、ピット5基(22～25、29SP)を検出した。平面形は24SPのみが長楕円形で、他は円形である。上記の柱列との関連も想定したが、規模や位置が不揃いであり同一の構造物であったとは考えにくい。22SPからはほぼ完全の土師器裏が割れた状態で出土した(図9、図11-8)。24SPは中央に柱痕が残る。22SPは直径0.4 mで深さ0.3 m。23SPは直径0.5 mで深さ0.4 m。24SPは長軸0.5 m・短軸0.3 mで深さ0.2 m。25SPは直径0.4 mで深さ0.1 m。29SPは直径0.5 mで深さ0.2 m。

調査区北西端で検出した30SPは平面形が隅丸方形である。同様の形状のピットは付近に存在せず、調査区から北西の範囲に構造物が存在すると想定する。最大幅0.9 m、深さ0.2 m。31SPは一部が30SPと重複するピットで、平面円形と考える。直径0.3 m、深さ0.1 m。31SPの東で検出した37SPは平面形が不整形である。直径0.4 m、深さ0.1 m。南北溝20SDの底面で検出した36SPは平面形が不整形である。20SD検出の際、上面では検出しなかったため20SDと同時期か、それより古い遺構であると判断できる。このピットの埋土は20SDの埋土と類似した土質であり、20SDと同時に存在していたと考えるが、詳細な機能は不明である。直径0.6 m、深さ0.2 m。

20SDは調査区中央を南北に縦断する溝で、横断面形は逆台形である。埋土の観察から、20SDは人為的に埋められたと考える。最大幅約2.0 m、深さ0.5 m。遺物は主に埋土上層に含まれる。遺物量は少量であるが、一部の遺物は溝の西端に近い地点から出土した(図10)。出土遺物は、藤原京期の土師器と須恵器が主体であり、遺構の埋没時期を示すと考える(図11-1、3、4、6、7、9、15、16)。埋土上層には多量の川原石も含まれ、貼石の可能性を想定し調査を実施したが、石が均一に貼られた様子は見られず、20SD埋戻しの際に混入したと想定する。



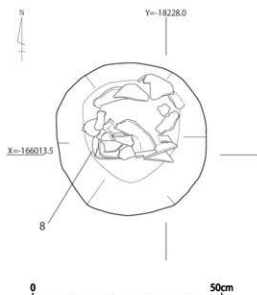


図9 22SP 遺物出土状況図 (S = 1/10)

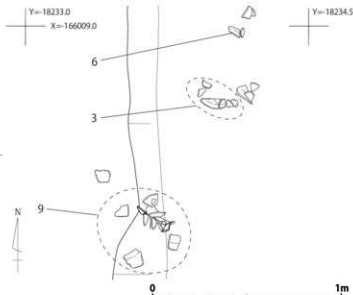


図10 20SD 遺物出土状況図 (S = 1/20)

### 第3節 出土遺物

出土遺物は土器を中心に、コンテナ数にして2箱分が出土した。以下、藤原京期に属する遺物(図11-1~18)とそれ以外の時期の遺物(図12-19~22)について、種類ごとに述べる。

1~9は土師器で、環・皿・甕・高環がある。

1は環Hである。口縁端部がヨコナデによって尖る。底部はケズリが施され、稜が形成されている。口径12.6 cm、残存高2.2 cmである。3、4は環Cである。3は、口縁端部を上方に摘み上げ、口縁内側に面が作りだされている。底部外面はケズリが施されている。口径14.4 cm、残存高4.8 cm。4は、口縁端部が丸く収められている。内面はナデの後に放射状の暗文ミガキが施され、外面はナデの後にケズリが施されている。口径15.5 cm、残存高4.7 cm。

2は、皿Aである。口縁がゆるく外傾する形状で、口縁端部はヨコナデによって僅かに折り返されている。内面はヨコナデ、外面は磨滅により調整不明である。口径22.7 cm、残存高2.3 cm。

5は、高環の脚部である。環部と脚裾部を欠く。脚部は回転ナデにより絞られて形作られている。外面はケズリで強い面取りが施され、内面は強いナデで成形時のしわが消されている。脚部に残る剥離面から、環部は脚裾を作ってから作り足されたとみられる。残存高5.5 cm。

6~8は甕である。6は、口縁端部がヨコナデによって丸く収められている。口縁部及び体部内面は強いヨコナデが施されているが、外面は磨滅により調整不明である。口径14.4 cm、残存高3.7 cm。7は、口縁端部がヨコナデによりやや尖る。体部外面はタタキの後、ケズリが施されたとみられる。外面には口縁部まで著しくススが付着する。頸部には工具の当たりが残る。体部内面はナデが施されている。口径15.8 cm、残存高7.0 cm。8は、口縁端部がヨコナデによりやや尖る。口縁から括れ部にかけて緩く曲がり、体部は丸く張る。口縁内外面にはヨコハケメが施されている。体部外面は、タテハケメで、底部のみヨコハケメが施されている。施されるハケメは緻密である。体部内面は、ユビオサエの後、ハケメが斜め方向に施されている。外面には体部から括れ部にかけてススが付着し、内面底部周辺にコゲが付着する。口径16.8 cm、体部最大径19.0 cm、器高17.9 cm。9は長胴甕である。

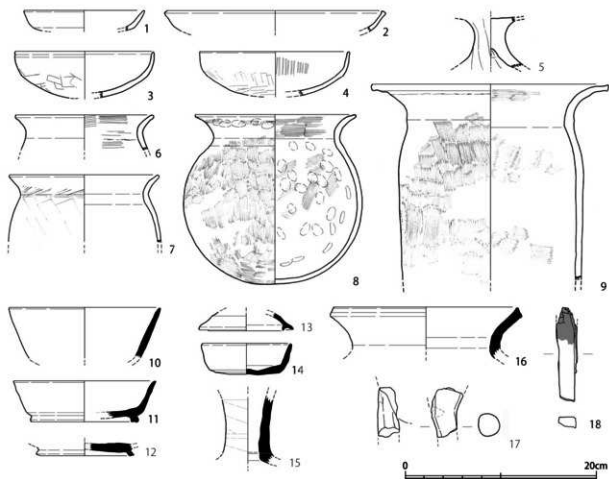


図 11 藤原京期の遺物 (S = 1/4)

口縁端部はヨコナデにより、僅かに上方に摘み上げられている。口縁から括れ部にかけてゆるやかに彎曲し、体部は張らず直線的である。体部外面にはタテハケメ、内面にはヨコハケメが施されている。胴部外面にスス、内面にコゲが付着する。口径 25.0 cm、体部最大径 19.6 cm、残存高 20.7 cm。

10～16は須恵器で、埴・坏・坏蓋・壺・甕がある。

10は埴Aである。口縁端部は尖る。口径 16.0 cm、残存高 4.2 cm。11と12は坏Bである。11は平らな底部に低い高台が付き、口縁はやや外傾する。口縁端部は回転ナデにより先端が尖る。口径 14.9 cm、底径 11.2 cm、器高 4.3 cm。12は坏の底部である。回転ナデにより成形されている。低く幅の狭い高台が付く。残存高 1.3 cm、底径 9.4 cm。14は坏Cである。平底にヘラ切り痕が残り、口縁は回転ナデにより先端が尖る。口径 9.5 cm、器高 3.3 cm。

13は坏C蓋である。口縁にはかえりが付く。回転ナデにより成形され、外面には回転ヘラケズリの痕跡が残る。口径 7.8 cm、残存高 1.9 cm。

15は長頸壺頸部である。口縁がゆるく外彎する形状である。回転ナデにより成形されている。残存高 7.2 cm。

16は甕の口縁部である。体部からやや外傾気味に開き、口縁端部は回転ヨコナデによって面が形成され、上方に摘み上げられている。口縁部内面には灰釉が付着する。口径 19.3 cm、残存高 5.4 cm。

17～22は土師器・須恵器以外の遺物である。

17は土馬の脚である。断面形は不整形で、外側となる部分に面取りが施されている。脚部の付

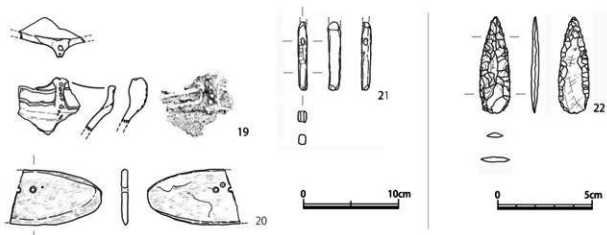


図12 藤原京期以外の遺物 (S = 1/4、22のみ S = 1/2)

け根には違いないが、どの部分の脚かは不明である。残存高 5.2 cm。

18 は燃えさしである。表面に加工の痕跡は無く、単純に木材を割ったものの破片であると考えられる。図中の網掛け部分は燃焼部位を示す。残存長 9.9 cm、厚さ 1.1 cm。

19 は縄文土器の深鉢である。波状の口縁部のみが残存である。口縁部に沿って沈線が施され、波頂部外面には刺突文が縦に並び、口縁端部まで及ぶ。残存高 6.0 cm。

20 は流紋岩製の磨製石包丁である。形状は楕円形に近い。刃は両刃であるが、片面は稜が明瞭なのに対し、他面はやや不明瞭である。紐穴の穿孔も両面から行われている。いずれの面にも途中で放棄した穿孔の痕跡が残る。幅 5.8 cm、残存長 9.5 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 46.3g。

21 は、用途は錘と想定されるが詳細は不明である。最大長 7.1 cm、幅 1.3 cm、厚さ 0.9 cm。表面観察から、材質は石と考えられるが、重さは 54.8g と極めて比重が高い。

22 はサヌカイト製の打製石鏃である。背面はほぼ全面に細かな調整の痕跡が残る。腹面は縁部分に調整が施されている。長さ 5.0 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.3cm、重さ 2.4g。

### 第三章 総括

#### 調査地周辺の変遷

調査を通じて、藤原京期より後に掘削された素掘溝の他は、藤原京期の遺構を検出した。藤原京期より古い遺構は検出されなかったが、縄文～弥生時代の遺物が出土することから近隣に縄文～弥生時代の遺跡が存在した可能性はある。古墳時代については遺構はおろか、遺物も存在しない。調査地周辺において人が住んでいた痕跡が明瞭になるのは藤原京期以降で、藤原京造営が契機となったことが想定される。藤原京廃絶後は耕地化が進み、現代まで耕作地として利用されていた。

#### 20SD の評価

調査地は復元条坊上の西二坊大路に西接しており、その側溝を検出する可能性があった。以下、20SD が西二坊大路の道路側溝であるかの是非を検討していく。

20SD の出土遺物は飛鳥V期が下限であり、藤原京期以降すぐに廃絶したと考えられる。溝の幅は最大 2.0 m である。過去の西二坊大路側溝検出例では、西側溝 1.6 m、東側溝 2.0 m が最大規模となる。

以上のように20SDは、遺構の時期・規模ともに藤原京の道路側溝と乖離しない遺構であり、規模は東側溝に近いと言える。

20SDが西二坊大路東側溝であるとした場合について考察する。調査地の南東約77mの地点で実施した榎教委2002-4次調査では、西二坊大路東側溝(SD-03)を確認した。SD-03の溝幅は2.0mである。SD-03北端溝心の座標はX=-166084.4、Y=-18207.6である。SD-03は、20SD(溝心X=-166011.5、Y=-18231.5)から南に約73mの距離であるのに対し、東に約24mも離れているため一連の南北溝ではないと考える。また、20SDとSD-03の心々間距離は、これまで明らかにされた西二坊大路両側溝の心々間距離16mを遥かに凌駕している。

続いて、近隣の西二坊大路西側溝検出位置と20SDの関係について考察する。調査地の北では、①奈良文化財研究所による藤原京第52次調査(右京二条三坊)で検出した南北溝SD5287、南では②同69-12次調査(右京五条三坊)で検出したSD7845が、西二坊大路西側溝として挙げられる。それぞれの座標は、①南端溝心がX=-165464.4、Y=-18231.2で、②北端溝心がX=-166482.4、Y=-18219.6である。各地点間の振れは以下の通りになる。

①-②間 N-0° 39' 10" - W      ①-20SD間 N-0° 1' 53" - E

20SD-②間 N-1° 26' 51" - W

①-②間の振れは、藤原京条坊道路の平均的な振れ幅に取まる。一方、①-20SD間の振れは僅かながら北で東に振れている。藤原京条坊道路は北で西に振れる傾向があり、これと逆行する。また、20SD-②間の振れは、北で1°以上西に傾いており、条坊道路の振れ幅としては大きい。さらに、①-20SD-②が同一の溝であるとする、今回の調査区周辺で西に彎曲する形状をとることとなる。条坊道路は直線的に設定されたと考えるならば、①-20SD-②のラインのように彎曲する形状は条坊側溝として不自然である。

なお、①-②のラインのX=-166011.5(20SD溝心)における西側溝想定位置はY=-18225.5であり、20SDの東約6.2mの地点にあたる。Y=-18225.5は調査区の東端に当たるが、調査区東端では側溝と考えられる遺構は存在しなかった。20SDが西側溝でなければ、西側溝はさらに東に通っていることが想定できる。西側溝が調査区のさらに東に通っていたとするならば、調査区東端で検出した柱列は四条三坊東北坪を囲む一本柱塼であった可能性を示せる。

以上、20SDについて調査地近隣の西二坊大路東側溝や、調査地周辺の西二坊大路西側溝の検出位置、調査で確認した柱列の位置との関係から、現時点で20SDが西二坊大路西側溝であった可能性は低いと判断される。20SDの詳細な機能については不明であるが、宅地内の排水等の機能であったのではないかと想定される。ただし、調査地のごく近辺においての西二坊大路の検出例は無く、藤原京右京四条三坊東北坪の様相も明らかではない。周辺の調査の蓄積を待って結論づけるべきであると考ええる。

#### 【参考文献】

- 奈良国立文化財研究所編 1990「西二坊大路の調査(第60-8次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』  
奈良国立文化財研究所編 1994「右京五・六条三坊の調査(第69-12次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』  
平岩欣太 2003『藤原宮跡の調査(榎教委2002-4次)』『橿原市埋蔵文化財調査概報20 橿原市埋蔵文化財調査概報 平成14年度』

報告書抄録

ふりがな	ふじわらきょうあと							
書名	藤原京跡VI							
副書名	右京四条三坊							
巻次								
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第13冊							
編著者名	橿原市教育委員会 杉山真由美							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財課							
所在地	〒643-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2016年1月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤原京 右京四条三坊	奈良県 橿原市 繩手町	29205	14C0576	34° 30' 12"	135° 48' 05"	2014/9/2 ～ 2014/10/27	186.4 ㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
藤原京 右京四条三坊	都城	先史  古代  古代～中世		包含層  土坑・ピット・溝  素掘溝		縄文土器・石器  土師器・須恵器・ 土製品・燃えさし  土師器・須恵器・ 不明石製品		橿教委 2014- 4次
要約	<p>藤原京右京四条三坊の調査では、主に藤原京期の遺構を確認した。確認した溝 20SD は宅地内の排水を目的として掘削された溝である可能性がある。また、調査区内では土坑や柱穴を検出し、藤原京右京四条三坊東北坪宅地内の様相を知る一端となる。なお、包含層中からは縄文時代～弥生時代の遺物が出土し、近隣において当該期の遺跡の存在が想定できる。</p>							



上層遺構検出状況（北から）



上層遺構検出状況（北西から）



上層遺構完掘・下層遺構検出状況（北から）

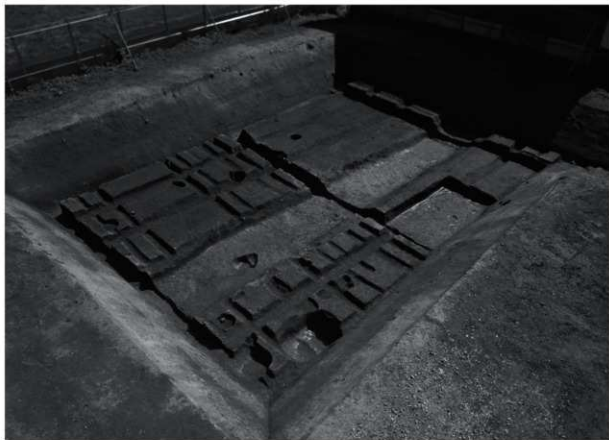


上層遺構完掘・下層遺構検出状況（北西から）



調査区と調査地周辺（北から）





下層遺構完掘状況（北西から）



下層遺構完掘状況（南東から）



27SK 炭化物層検出状況（東から）



27SK 土層断面（東から）



22SP 遺物出土状況（北から）



23SP 土層断面（北から）



24SP 土層断面（北東から）



柱列完掘状況（北から）



34SP 土層断面（西から）



35SP 土層断面（西から）



39SP 土層断面（西から）



40SP 土層断面（西から）

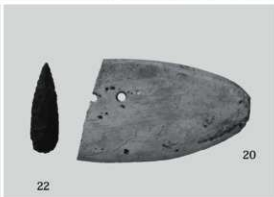




20SD 遺物出土状況（北から）



20SD 土層断面（北から）





橿原市埋蔵文化財調査報告 第13冊

藤原京跡Ⅵ

—右京四条三坊—

発行年月日 平成28(2016)年1月29日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会

印刷 株式会社 明新社  
奈良市南京終町3丁目464番地